

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380450

研究課題名(和文) 両大戦間期インドにおける金融制度の「再編」と中央銀行の役割

研究課題名(英文) The Role of the Central Bank and the Transformation of the Financial and Banking Systems in British India between the World Wars

研究代表者

西村 雄志(Nishimura, Takeshi)

関西大学・経済学部・教授

研究者番号：10412420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは両大戦間期のインドにおける中央銀行設立の過程とそれに伴うインド国内の金融制度の「再編」について研究するものであったが、総じて研究計画が立ち遅れたために、成果の刊行がプロジェクトの終了に間に合わなかった。しかしながら、成果を発表するためのデータ整理や先行研究の分析、関係する金融史・銀行史研究については、当初の想定以上に進み成果を発表することができた。今後、出来るだけ早い段階でインドの中央銀行(インド準備銀行)と国内金融機関や決済のシステムに関する本プロジェクトの成果をワーキングペーパー(英語)で発表する予定にしている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to explore how the domestic financial systems, mainly the banking system, were transformed in the process of the establishment of the central banking, the Reserve Bank of India, between the world wars. However, because this project made a slower start than the original schedule due to the various problems, I have not been able to publish and present the results of the project by the end of this March. At this point, I plan to publish the results of the project as a working paper written in English within the next fiscal year. I have already finished to make arrangements for publishing. Nevertheless, I could publish and present the results concerning the research of activities of the international exchange banks more fruitful than the original plan. I would like to continue to develop my research of the international exchange banks' activities.

研究分野：近代アジア経済史

キーワード：中央銀行制度 インド準備銀行 決済システム

1. 研究開始当初の背景

近年のアジア経済史研究の深化の中、インド経済史研究も格段の実証分析の高まりと成果を挙げて来ている。特に具体的な商業活動の実態や商人たちの出自や宗教等については研究水準の高まりは、日本国内の研究水準が世界的に見ても高いレベルに達していることは特筆に値する。

しかしながら、インドの金融史あるいは銀行史に関する研究は、これらと比較して歩みが止まっていると言わざるを得ない。インドの経済史研究において、20世紀初頭にJ.M.ケインズが『インド通貨と金融』を著した頃から、金為替本位制がインド経済史に及ぼした影響は如何なるものか、ポジティブに捉えるものか、それともネガティブに捉えるものか等、近年まで活発な議論が行われてきた。それに付随してインドの銀行制度や資本市場等についても、イギリスの植民地搾取の一環として捉える考え方、当時のインド経済の実情に鑑みれば適応した制度であったとする見解、様々な主張が展開されてきた。こうしたインド経済史の主流を成してきた金融史あるいは銀行史研究は、ここ数年の間に世界的に見ても急速に歩みが止まっており、新たな展開が至急求められている分野と言える。

研究代表者はインド経済史の中でも金融史に軸足を置いて研究を進めてきており、国際銀行業の展開だけでなく、実際に商人たちがどのような決済を行っていたのか、マイクロのレベルからも考察したいと考えてきた。そのように考えていく中で、インドの金融システムが一つの「まとめり」を形成し始めた時期は1920年代ではないかと考えるようになった。1923年にインド帝国銀行が設立され、その後1935年にインド準備銀行が設立されるまでの時期が、インドの金融システムと銀行制度を考える上で重要ではないかと考えた。したがって、

その時期の決済制度の「再編」とその時期につながる国際銀行をはじめとする近代銀行制度のインド国内での発展、そしてインド準備銀行に結実する中央銀行制度がどのような役割を果たしたのか、一次資料を再検討しながら考察したいと考えた。

2. 研究の目的

インド金融史あるいは銀行史研究は、独立後のインド経済の発展を考える上でも大変重要であると同時に、植民地期インドの経済政策を考える上でも重要な課題でもある。それに関わらず、近年の研究成果の蓄積が著しく停滞していることは先に述べた通りである。インド経済史、特に金融史・銀行史研究を改めて前進させる意味でも本申請課題に取り組む必要があると考えた。

インド金融史・銀行史研究において、その中心的な課題は金為替本位制の研究であり、イギリスによるインドへの植民地収奪や健全な経済成長を歪めたとするナショナリスト史観からのアプローチであった。現在でもインドがイギリスによって植民地支配されたことに伴い、「富の流出」が起こり、様々なかたちでイギリスにインドが獲得した富が収奪されたと考える見解が大勢を占めており、渡辺昭一をはじめ多くの研究者が強調している。彼らに共通している点は金為替本位制がインド経済を収奪するための手段であって、インド経済は金為替本位制によって国際金本位制の枠組みの下でイギリスの圧倒的なヘゲモニーを支える役割を押し付けられたと考えている。しかしながら、金為替本位制が確立した20世紀初頭のインド経済について、特に貿易の観点から捉えた時、その見解には大きな修正が迫られていることも指摘しなくてはならない。

貿易史からの視点では、杉原薫をはじめ多くの経済史研究者が、19世紀中葉以降のインドの国内交易や遠隔地貿易は衰退では

なく、むしろ発展したことが実証的に明らかにされている。その際、イギリスの大規模な商社や商人だけでなく、インド現地の中小の商人に至るまで貿易の拡大の恩恵を受けており、いわゆる「二重経済」のかたちになっていなかったことも明らかにされている。こうした点を研究代表者は金融史の観点からも明らかにしたいと考えた。

研究代表者は、インドが自ら関税を設定することが出来るようになった第一次世界大戦後の時期に焦点を当て、綿製品を中心に日本をはじめアジア各地で工業化が進んでいく中、綿花を中心に欧米諸国だけでなくアジアに対しても第一次産品輸出を拡大させ、それと同時に自国の工業化も促進しながら世界経済との緊密性を強めていったインドの経済構造を、銀行制度あるいは決済システムの観点から析出しようと考えた。その際、特に重要視したのが中央銀行制度であり、ケインズが1914年のチェンバレン委員会の報告書の参考資料として執筆した「国立銀行設立草案」の分析から1923年のインド帝国銀行設立の意義、そして1935年のインド準備銀行設立に進んでいくプロセスを主に旧インド省文書館の一次資料を駆使しながら明らかにしたいと考えた。

3. 研究の方法

研究の方法としては、主にロンドンにある旧インド省文書館に所蔵されている一次資料を収集し、それらを分析することで大枠を定め、それに二次文献をはじめとする先行研究と比較検討することで議論を深めていく事とした。それに加えてデリーのインド国立文書館やマハラシュトラの州立文書館への資料収集も行う予定にしていた。

実際、初年度から旧インド省文書館の資料収集を行いつつ、二次文献の分析等を進めたが、当初の想定より旧インド省の文書類の分析が難しいことが判明した。そのた

め旧インド省に残された一次資料を分析することに専念する事とし、インド国立文書館やマハラシュトラ州立文書館への資料調査、ならびにブネーにあるインド準備銀行の資料室に調査へ赴くことは新たにプロジェクトを立ち上げることで次の機会にすることとした。

初年度は一次資料の収集に努めた。夏季休業中にロンドンへ赴き、どのような資料が残存しているのか、目録を中心に調査した。その結果、必要と思われる資料を日本から購入していった。同時に両大戦間期のインドで業務を展開していた銀行の一次資料の収集や進出していた三井物産をはじめとする日本企業の資料からも接近する方法を取り入れた。その結果、両大戦間期のインドで行われていた金融機関や決済システムについて、これまで明らかにされていない点が見出されるようになった。

次年度は、新たに見出された論点を中心に資料収集を行った。特に視点を設置していた国際銀行やインドに進出した商社の駐在員の個人文書の分析を行い、これまで十分に明らかにされてこなかった両大戦間期インドの金融機関や決済の状況が明らかになった。具体的にはインドの決済システムが中央銀行制度の枠組みの中で急速に「再編」され、世界市場からの影響を短期間でダイレクトに受けるかたちに発展を遂げていたことが見出された。翌年度に国際経済史会議があるため、そこで報告するための論考に一旦まとめる作業に後半は費やした。

最終年度は、前半は国際経済史会議に向けて、成果の一端をまとめることに専念した。8月上旬に終了したのち、9月下旬にロンドンのLSEで発表する事となったため、引き続き論考の整理に専念した。そのため両大戦間期インドのインド準備銀行の設立に向かう、インド帝国銀行やインド省の政策的な判断について十二分に検討でき

なかった。

最終年度の予期せぬ発表の機会を得た事に加え、私事による思わぬ計画の混乱のため、更に1年間の研究期間の延長が認められた。それに伴い、二次文献を再度読み直しつつ、インド準備銀行設立に向かうインド省の政策的な判断やインド帝国銀行の位置付けについて、可能な限り前進させられるように努めた。結果として、十分な内容まで達することができなかったが、収集した一次資料を引き続き分析して、遅れても論考のかたちで発表する予定にしている。

4. 研究成果

研究成果としては、第17回国際経済史会議において両大戦間期のインドにおける三井物産(のちに東洋棉花)の活動から見た決済構造の重層性について、当時ボンベイ支店に勤務していた笹倉貞一郎氏の個人文書を分析した成果の一端を報告することができた。しかしながら、その内容については未だ論考としてまとめる段階までは至っていない。引き続き研究を続けていく予定にしており、次回のボストンでの国際経済史会議で報告する機会を得たので、それまでには英文のワーキングペーパーのかたちで発表する予定にしている。

中央銀行制度に関しては、旧インド省文書の分析を引き続き行っており、申請期間内で成果にまとめることが出来なかったが、できるだけ早期に英語のワーキングペーパーのかたちで刊行させる予定にしている。とくにインド帝国銀行が中央銀行としての機能を担うには不完全なかたちであったことから、通貨政策においてもインドの貿易拡大や資本の移動等に機動性が確保できず、結果として1929年の大恐慌以降の金融の不安定な状況を助長することになった経緯について、できるだけ早めに成果として刊行するつもりである。

大恐慌がどの程度までインド経済にダメ

ージを与えたのか、Balachandran や Bagchi も積極的に検討を重ねたが、いわゆるナショナリスト史観の枠組みに強く影響を受けており、実証的な分析が行われていない点が数多く散見されることから、本申請代表者はできるだけ一次資料に基づいて検討し直したいと考えていた。未だ全体の分析は済んでいないが、一次資料だけで描ける範囲を把握することだけでも最低限行いたいと考えている。

インド準備銀行の設立の動きは、大恐慌以降に本格化した。大恐慌によりインドでは大きな銀行や商人達だけでなく、零細な農民や中小の商人たちの日々の経済活動にも深刻なダメージを与えたことが先行研究でも明らかになっている。このように両大戦間期のインドではグローバルな経済的混乱がローカルな経済活動にまで影響を与える程度に「再編」されていた事実を踏まえ、インド準備銀行は中央銀行としてどのような役割を期待されていたのか、一次資料から明らかにする必要がある。この点についても未だ論点の整理が終わっていないが、できるだけ早急にワーキングペーパーのかたちで刊行するつもりである。

両大戦間期のインドの中央銀行制度を考察していくなかで、インドで活躍していた国際銀行にも関心を寄せるようになった。具体的には香港上海銀行(Hongkong and Shanghai Banking Corporation, hereafter HSBC)と横浜正金銀行について検討を重ねた。その際、収集した一次資料のなかで取り組みやすい支店から取り組み始めた。その結果は海外の学会で報告する機会を得ており、これらも順次成果として刊行していく予定にしている。HSBCは先行研究では頻繁に取り上げられる金融機関ではなかったが、日本への綿花輸出を考察した場合、横浜正金銀行と対抗するかたちで三井物産の取引を得ようと努めていたこ

とが明らかになった。この点からインドにおける両大戦間期の決済システムの重層性とそれに関係する金融機関、中央銀行としてのインド準備銀行の役割を多面的に描き出すことで、本研究の最も核となる成果をまとめたいと考えている。その論考については、英語のワーキングにまとめるだけでなく、海外の査読付雑誌に投稿するつもりで現在準備を急ピッチで進めている。加えて両大戦間期のボンベイに支店を設置していた横浜正金銀行の経営についても分析を続けており、その成果は今年度末に刊行予定の研究代表者と菅原歩(東北大学)が編者の論文集の中に収録の予定である。

両大戦間期のインドの金融制度の「再編」は独立後のインド経済がどのような歩みを示すかと言う点で大きな意味があった。独立後のインドは、それまでの開放政策の方針を大きく転換させ、貿易を制限して外国から輸入していた商品を国内で可能な限り生産する輸入代替化の方向に舵を切った。それに合わせて金融機関の国有化が進められ、インド準備銀行もその中心的な役割を担った。この時、国内経済をインド準備銀行の下にコントロールできたのは、独立前にインド準備銀行を設立する際の組織の改編が成功していたためと言える。独立前後のインド金融制度の変容については、悠書館から刊行予定の『金融の世界史：現代版(仮)』で大枠の流れは描いている。本研究を通じて、多方面に問題関心が拡大した結果、中心となる両大戦間期のインドにおける中央銀行制度の「再編」については成果を出すのが遅れているが、その分析から見出された別の問題関心については、今年度から随時成果として刊行されていく予定である。いずれも英語のワーキングペーパーで発表する予定にしているが、中央銀行制度と重層的な決済システムとの関係性については、インドをはじめとする英語圏の研

究者と議論したいので、可能な限り海外の査読付雑誌に投稿していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

Takeshi Nishimura, “A Preliminary Investigation into the Activities of the Hongkong and Shanghai Banking Corporation in Nagasaki during the Meiji Period”, *Kansai University Review of Economics*, No.19, March 2017.

西村雄志「両大戦間期上海における倉庫業の概観」関西大学経済史研究会(編)『経済発展と交通・通信』関西大学出版部、2015年。

西村雄志「銀本位制から金本位制へ：アジア諸国」西村閑也・赤川元章・鈴木俊夫(編)『国際銀行とアジア 1870~1913』慶應義塾大学出版会、2014年。

西村雄志「横浜正金銀行 1880~1913」西村閑也・赤川元章・鈴木俊夫(編)『国際銀行とアジア 1870~1913』慶應義塾大学出版会、2014年。

[学会発表](計5件)

— Takeshi Nishimura, “The Activities of the Hongkong and Shanghai Banking Corporation in the Dutch East Indies before the First World War”, presented at the First World Congress of Business History / 20th Congress of the European Business History Association, University of Bergen, Bergen, Norway, 27th August 2016.

— Takeshi Nishimura, “British International Banks in Asia, 1870-1913: An Interpretation of their Activities in relation to the Growth of Asia’s Trade” presented at the Workshop on Asian Trade and

Monetary History in the Long 19th Century, London School of Economics and Political Science, London, United Kingdom, 21st September 2015.

— Takeshi Nishimura, “The Role of the Bangkok agency of the HSBC in Southeast Asia before 1913”, presented at the 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center, Kyoto, 5th August 2015.

— Takeshi Nishimura, “The role of multiple payment systems in raw cotton trade between India and Japan in the 1920s: a case of Tokyo-Menka Kaisya”, presented at the 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center, Kyoto, 4th August 2015.

— 西村雄志「19世紀末のバンコックにおける香港上海銀行の活動」日本金融学会・秋季大会、2014年10月19日、山口大学(山口市)

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 雄志 (NISHIMURA, Takeshi)

関西大学・経済学部・教授

研究者番号：10412420